

## 豊富なエピソードで下町の労働運動史を語る

小畑精武氏

4月21日のアフター5は、「下町の労働運動史」。講師は、長年、下町に住み「江戸川ユニオン」という地域の労働運動に携わっている小畑精武さん。

話は、「日本最初のストライキ」が、江戸末期の銭座(現在の葛飾区小菅)において、賃上げを要求することから始まったこと、さらには、相撲取りも公正な運営を求めて回向院に立て籠もった、という意外なエピソードからスタート。そして明治維新。



広重の「名所江戸百景」に登場している小名木川、亀戸、州崎という下町こそ明治から大正、昭和と飛躍的に発展した日本資本主義の拠点だった。

情緒のあった運河や池が埋め立てられ、紡績、セメント、造船、化学の主要企業がここで誕生したが、その発展の歴史は、苛烈な労働に対する労働者たちの抵抗や闘争の繰り返しだったという。そのためサンジカリズムも政治活動もセッルメントもこの下町が舞台だった。その最初の頂点が

関東大震災後の亀戸事件だった。

その後、労働運動は、不況と恐慌そして戦時体制と弾圧というなかで多くの犠牲者を出し惨敗に終わった。

だが小畑さんは、亀戸事件で血の犠牲を払った南葛労働組合は、戦闘力や連帯感に富んだ「南葛魂」として地域の運動に継承されたという。

しかし、戦後、下町の労働運動は、大手企業では京成電鉄や東交などで争議があったものの、昭和30年以降は、見るべきものがない。

ほとんどが大企業の下請け企業や中小企業、未組織労働者による「一人の首切りも許さない」争議ばかりだった。小畑さんの話を聞きながら大企業の労働者は、なぜ立ち上がらなかったのか、地域の労働者と共闘できなかったのか、など素朴な疑問が残った。

そうした中で小畑さんが取り組んできた東部労働運動、ユニオン運動が健在であることに尊敬の念を強くした。

最後に、小畑さんはこうした下町の労働運動について「下町、東部地域の先輩、先達、親や祖父母たちが遺した運動史を訪ね(調べ)、下町の運動のDNAを探し、後輩のみなさんに語り継いでいくことができればよい」と締めくくった。(夏目孝吉)